

認識論と道徳への工学的アプローチについて

植原亮 (Ryo Uehara)

関西大学総合情報学部

哲学的自然主義に立つ場合、認識論と道徳における規範性は、双方ともに工学的アプローチを用いることで扱えるようになることが見込まれる。しかし、両者の相違や課題についての検討は、これまで十分になされてきたとはいいがたい。そこで本提題ではまさにこの点を問題として取り上げ、とくに道徳に対する工学的アプローチについて、認識論におけるクワイン以降の議論との比較・検討を行い、その課題を明らかにすることを目指したい。

規範性に関する工学的アプローチの由来は次の通りである。はじめに、自然主義に対しては、それがもっぱら事実に関する記述を扱うものであるため、規範性を適切に位置づけることができないのではないか、という疑問が突きつけられる。一般に自然主義では経験科学との緊密な連携が唱えられるが、科学が関わるのはこの世界についての事実的な問いのみであり、したがって規範の探究という哲学上の重要課題を適切に扱うことはできない、と批判されることになる。こうした批判に対し、規範性を自然主義的に扱う手立てのひとつとして提出されるのが、工学的アプローチである。

この発想はもともと、認識論の自然化とその規範的側面に関するクワインの見解に由来する。クワインによると、規範的認識論とは真理の獲得や予測の制御のためのテクノロジーであり、そこでの規範性は工学における規範性の一種として位置づけられるようになる。工学では、いったん目標が設定されれば、それにまつわる事実を特定するのに経験的知見を自由に参照することが許され、また同時に目標達成のために何をすべきかという規範が工学的問題の解として与えられる。これと同じく、認識に関する規範もまた、人間の心の働き方や利用可能な資源などの制約条件についての事実的な知見にもとづいて、真なる信念をどのような方法で形成すべきかを問うことで得られることになる。

そうして規範的認識論が自然化されて工学の一章になるならば、道徳の自然化に関しても同様の工学的アプローチが適用可能と考えることができるだろう。道徳哲学・倫理学は、際立って規範的色彩の色濃い領域であるが、このアプローチのもとでは、道徳に関する規範もまた工学的問題の解として求められることになる。とりわけ、人間の道徳判断に関する経験科学上の近年の研究は、道徳の自然化を進めながら道徳規範を工学的に探究するための重要な知見を提供しており、そこからは現実の人間にとって実行可能な規範をある程度まで具体的に構想することが可能となる。

道徳の工学化を目指すこうした見方は、ひとまず道徳をこの世界に生起する自然的な現象の一種として捉えたうえで、それをわれわれ自身の目的を達成するための制御や改善の対象と見なすことにほかならない。道徳とは時間とともに進化を遂げてきた生物・文化的人工物の一種である、との見方は少しずつ共有されつつある。そのような人工物としての道徳を自生的な秩序に任せて進化させるのではなく、人間に望ましい方向へと意図的に導くための方策を模索するのが、工学的アプローチといえる。

クワイン以降の規範的認識論の流れに目を移すと、工学的アプローチに関連する見方として注目されてきたのが、ゴールドマンに代表される信頼性主義的な知識観である。そこでの認識規範は、大枠では、真なる信念を形成する見込みが高いという意味で信頼のおける信念形成プロセスを用いるべし、というものになる。このとき、何がいかなる条件のもとで信頼のおける信念形成プロセスとなるのかは、人間の心的過程を含むこの世界に関する事実的問いと不可分であり、とりわけ各種の認知バイアスを乗り越えて誤りを避ける手立て（個人の外部にある環境の操作・改変をも含む）についての理解が認識規範の探究には欠かせないことになる。

道徳の工学化にもこれとの並行関係が見られる。すなわち、認知バイアスの克服もしくはその生起の回避を図ることで、たとえば個人の自律性の維持や向上を促し、善き生の実現という目標の達成を試みることができると見込まれる。あるいは、人間のもつ自然な傾向としての応報感情の発露を抑制して社会秩序を安定させるべく、個人間の紛争解決は第三者的な公的制度の構築を通じて進める、という具合である。

しかし以上に関しては、認識論と道徳への工学的アプローチの相違と思われる点もいくつかある。大きな点としては、第一に、規範に従うことで達成される目標が何であるのかに関しての明確さの度合いである。認識論においてはさしあたり真なる信念の獲得を目指せばよいと考えられるが、道徳に関しては、善き生の実現なのかそれとも社会秩序の安定化なのか、といった疑問が生じる。これは、道徳的なものの領域とそれ以外とを区切るのは何かという根本的な問いと深く関わっており、また道徳の成立に関してどのような前提を立てるのか（とくに道徳生得説的な観点に立つのか、そうではなく経験主義的な立場を採るのか）に応じて、工学的アプローチの構想にもその普遍性ないし包括性、あるいは局所性や多様性といった点に関して実質的な影響が及ぶことを示している。

第二に、道徳に関しては、人間を道徳的な責任を負うことのできる合理的主体と見なすという、認識論では直接的には着目されにくい実践がつきものであるが、人間を操作や制御の対象と捉える工学的アプローチではその重要性が見過ごされてしまうようにも思われる。この点については、たとえば近年喧伝されるナッジ的な手法の是非をめぐる議論を焦点的に取り上げることを通じて、そうした実践そのものについて再検討を加え、新たな位置づけを与えることができる。

主な文献

- Flanagan, O., Sarkissian, H., and Wong, D. (2016). Naturalizing Ethics. In K. J. Clark ed., *The Blackwell Companion to Naturalism*. Wiley Blackwell.
- Kitcher, P. (2011). *The Ethical Project*. Harvard U. P.
- Levy, N. (2017). Nudges in a post-truth world. *Journal of Medical Ethics*, 43: 495-500.
- Prinz, J. J. (2012). *Beyond Human Nature: How Culture and Experience Shape Our Lives*. Allen Lane.
- Quine, W. V. (1986). Reply to Morton White. In L. E. Hahn and P. A. Schilpp eds., *The Philosophy of W.V.Quine*. Open Court.
- 植原亮 (2017) 『自然主義入門——知識・道徳・人間本性をめぐる現代哲学ツアー』、勁草書房